

「練達」と「品格」～ギリシャ語聖書の用例研究

幡 新 大 実

‘Experience’ and ‘Character’: A Study of relevant Biblical Verses in Greek

Omi Hatashin

抄 録

本稿は、ローマの信徒への手紙5章4節の文語訳以来の「練達」が2018年の聖書協会共同訳において「品格」に訳し換えられたことについて、今日の英語訳の間で広く流布している character を「人格」ないし「品格」と現代的に解釈することの妥当性を、聖書の英語訳の歴史的文脈、英語とドイツ語の聖書辞書及び註解、英語圏やドイツ語圏の社会における「信頼」と日本社会における「信頼」の文化的差異を踏まえて、ギリシャ語源ドキメーの語幹共有語の語形変化や活用のギリシャ語聖書における用例39句の検討を通して議論する。とくに、ローマ5章3-4節は、ユダヤ教の信仰の伝統を受け継ぐキリスト者のアイデンティティの表明である。

キーワード：練達、品格、ドキメー、ギリシャ語新約聖書、キリスト者のアイデンティティ
(2023年10月19日受理)

Abstract

This paper discusses the appropriateness of the 2018 Japanese translation of *dokime* in Romans 5: 4, by exploring all the 39 usages of the Greek words sharing its stem taking into account their declensions and conjugations in Greek New Testament. Liddell and Scott have “approved character” for *dokime*. The former seems to be the origin of the new Japanese translation, *hinkaku*, but its usage in the contemporary Japanese cultural environment makes it quite different from the English original. Japanese *hinkaku* connotes a subjective and aesthetic feeling, whereas English “character”, especially as a modern rendition of the early sixteenth century “experience”, seem to have meant the description of a person’s objective qualities. EKK says Romans 5: 3-4, James 1: 2-4, and 1 Peter 1: 6-7 express Christian identity in their own ways, following the Jewish tradition of faith which is expressed by the metaphor of gold *tested* in furnace to be acceptable to God.

Keywords: experience, character, *dokime*, Greek New Testament, Christian identity
(Received October 19, 2023)

1. 序

ローマの信徒への手紙5章4節（以下ローマ5章4節の形で略記）のドキメー δοκιμήが、1889年文語訳聖書以来の「練達」から2018年聖書協会共同訳では「品格」に変わった（中野2021年72頁）。しかし、希独新約聖書辞典（Bauer, 1988, S407）はErprobtheit（試験済であること、確かなこと、信頼できること）と訳し、その聖書用例としてローマ5章4節のほか、第二コリント2章9節、同9章13節、フィリピ2章22節を挙げている。この点、2018年訳は「確か」（第二コリント2章9節とフィリピ2章22節）、「〔奉仕の〕業」（BauerはErprobtheit im Dienst）と別の訳語を用いており、一貫しない。そこで、本稿は、ローマ5章4節だけ「練達」という直訳から離れて「品格」という訳にして語弊がないのかどうか、点検を試みたい。その方法として、ドキメー δοκιμήという名詞は新約聖書パウロ書簡以前には出現例がないとされ（中野2021年73頁）、構文の違う他言語への翻訳において品詞を変えて訳すことはよくあり、逆にギリシャ語原典の解釈においても品詞の違いに不必要に囚われるべきではないと思われるので、ギリシャ語文献辞典（Thesaurus Linguae Graecae）のデジタル検索を用いて、名詞の源となったと思われる動詞ドキマズドー δοκιμάζωや形容詞ドキモス δόκιμοςなどを含めて（語源について希独辞典Gemoll, 2012, S235参照）、新約聖書における語幹共有語の語形変化や活用を含めた全39例を、とくに数節にまたがるギリシャ語構文の中での意味を捉えつつ、国際的に定評のある英語聖書注解（ICC）とドイツ語新約聖書注解（EKK）も参考にしながら検証してみる。

本稿の基本的な問題意識として、「品格」という2018年訳は、例えば希英辞典（Liddell and Scott, 1940, p. 442）の挙げる approved character の character という英語訳を日本語に訳す過程で、本来であれば、英語訳もその発生史を踏まえて英語圏での用法に従って捉えるべきであるのに、「人格形成」（character building）という現代英語の日本語訳（中野2021年73頁）をあくまで日本語の語感で捉えて発生した誤訳である危険性を予め示唆しておきたい。端的にいえば、英語訳 approved character はラテン語訳（Vulgate） probatio の「認可、認証」（Lewis, 1889, p. 812 の1番 approval）の意味で character を形容しており、character には「人物評価書」や「評判」という対象者の仕事上の客観的な資質や信頼性（Stevenson, 2007, p. 384 の5番 a description or detailed report of a person's qualities や6番 the estimate formed of a person's qualities; reputation; good repute）の意味がある。また、その方が、1534年のTyndale訳や、1537年のMatthew訳や、1611年の欽定訳（King James Version）の experience の「試験による証明、実践で示すこと」や「知識の源とみなされる実際に経験した事実や出来事」（Stevenson, 2007, p. 899 の2番 proof by actual trial; practical demonstration や3番 practical acquaintance with facts or events, considered as a source of knowledge）という意味や、1545年のルター訳の Erfahrung 「実践や何かを繰り返すことで得られる知識」（Drosdowski, et al, 1996, S447 の1番 bei praktischer Arbeit oder durch Wiederholen einer Sache gewonnene Kenntnis）や「熟練」（相良1963年448頁）の意味に近い。「練達」という1889年文語訳もその趣旨で捉えられる。一方、日本語

の「品格」は、「品位、気品」（木原他 2001 年 11 卷 634 頁③）とされ、「品位」の意味は「その人にそなわる気品やりっぱさ、品のよさ」（木原他 2001 年 11 卷 633 頁①）、つまり対象者の実践的な信頼性とは異質な美学的、感覚的な概念に過ぎない。同じ「信頼」でも、英語圏やドイツ語圏の社会における信頼は、業績書に記される客観的な仕事上の資質、いわば「腕」を「頭」で評価して抱く信頼で、それが事実と異なれば、裁判所に私文書偽造及び同行使や詐欺で訴えることのできる性質のものであるのに対し、日本社会での信頼は、いわば「肌」で感じ「心」で安心できる信頼であって、裁判所の判断にはなじまないという「文化」的な違いも指摘されるべきであろう（Meyer, 2014, pp. 163-174）。従って、英語で読めば、英米法の信託受託者の責任を果たし得るような対象者の客観的な行動履歴に依拠した信頼性に連なりそうな聖句であっても、「品格」という日本語訳を用いると、そのような解釈可能性が雲散霧消してしまう嫌いがある。

なお、第二コリント 9 章 13 節のドクメー（練達）の Bauer (1988, S407) 訳 Erprobtheit im Dienst「奉仕における証明」は、関西学院の校訓 Mastery for Service の日本語訳「奉仕のための練達」に一見近いので付言すると、英語校訓の聖書的典拠はマルコ 10 章 43-44 節「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい」であり、同校訓は、カナダのマギル大学マクドナルド学寮の寮訓「Mastery for Service」が大正初めにベーツ師を通して関西学院に伝えられ（池田 2000 年 169 頁、辻 2006 年 24-5 頁注 30）、1952 年頃に「奉仕のための練達」と和訳されたという（辻 2002 年 702-4 頁）。しかし、ベーツ師は文脈に応じて校訓の解釈を変えたという（辻 2006 年 17 頁）。それなら、mastery という英語に金偏の「練達」という聖書用語（1889 年文語訳ではロマ〔ローマ〕16 章 10 節とピリピ〔フィリピ〕2 章 22 節と後テモテ〔第二テモテ〕2 章 15 節に出現し、ロマ〔ローマ〕5 章 4 節だけ糸偏の「練達」）を当てて日本語校訓を編み出したキリスト教学校の趣旨に沿う聖句が、マルコ 10 章 43-44 節とは別に存在してもよいかもしれない。もし本稿に、そういう日本語校訓のギリシャ語聖句上の典拠の発見に資するところがあれば、幸甚である。

2. ドクメー語幹共有語の新約聖書における用例

ギリシャ語文献辞典（Thesaurus Linguae Graecae）を用いてドクメーの語幹共有語の新約聖書用例をデジタル検索すると、以下の 39 用例が見つかった。表 1 の右端はドクメーと語幹を共有する語の種類、㊦名詞（δοκιμή）、㊧形容詞（δόκιμος）、㊨形容詞（ἀδόκιμος）、㊩名詞（δοκίμιον）、㊪動詞（δοκιμάζω）、㊫名詞（δοκιμασία）の 6 種を表す。

表 1 ドクメー語幹共有語の用例

書	章：節	用例	類別	8	9	10	11	12	13	14	15
ルカ	12:56	δοκιμάζειν	㊦	ローマ	12:2	δοκιμάζειν	㊦	第一コリント	14:18	δόκιμος	㊧
	12:56	δοκιμάζειν	㊦		14:22	δοκιμάζει	㊦		16:10	δόκιμον	㊩
	14:19	δοκιμάσαι	㊦		16:10	δόκιμον	㊩		3:13	δοκιμάσει	㊦
	1:28	ἐδοκίμασαν	㊦		11:19	δόκιμοι	㊧		11:28	δοκιμαζέτω	㊦
ローマ	2:18	δοκιμάζεις	㊦	11:28	δοκιμαζέτω	㊦	16:3	δοκιμάσητε	㊦		
	5:4	δοκιμήν	㊦	15	16:3	δοκιμάσητε		㊦			
	5:4	δοκιμή	㊦								

書	章：節	用例	類別	28	フィリピ	2:22	δοκιμὴν	㉗
16	2:9	δοκιμὴν	㉗	29		2:4	δεδοκιμάσμεθα	㉘
17	8:2	δοκιμῆ	㉗	30	第一テサロニケ	2:4	δοκιμάζοντι	㉘
18	8:8	δοκιμάζων	㉘	31		5:21	δοκιμάζετε	㉘
19	8:22	ἐδοκιμάσαμεν	㉘	32	第一テモテ	3:10	δοκιμαζέσθωσαν	㉘
20	9:13	δοκιμῆς	㉗	33	第二テモテ	2:15	δόκιμον	㉙
21	10:18	δόκιμος	㉙	34	ヘブライ	3:9	δοκιμασία	㉚
22	13:3	δοκιμὴν	㉗	35	ヤコブ	1:3	δοκίμιον	㉛
23	13:5	δοκιμάζετε	㉘	36		1:12	δόκιμος	㉙
24	13:7	δόκιμοι	㉙	37	第一ベテロ	1:7	δοκίμιον	㉛
25	ガラテヤ	6:4	δοκιμαζέτω	38		1:7	δοκιμαζομένου	㉘
26	エフェソ	5:10	δοκιμάζοντες	39	第一ヨハネ	4:1	δοκιμάζετε	㉘
27	フィリピ	1:10	δοκιμάζειν					

以下、各用例の意味を各聖句の文脈の中で考察する。下線はその訳語を示す。なお、㉙ δόκιμος に接頭辞 ἀ をつけて意味を反転する㉚ ἀδόκιμος の用例は、㉔ローマ1章28節などの他の語と同じ節にある場合以外は煩雑化を避けるために外した。この点の検索範囲の限定については、本検索の意義を減じる効果は小さいと思われる。※は、Bauer (1988) の解釈などを示した。一部、本稿訳について後述する。

①②ルカ12章56節 (㉘動詞現在不定詞能動態が2回)

(Westcott and Hort, 1881) ὑποκριταί, τὸ πρόσωπον τῆς γῆς καὶ τοῦ οὐρανοῦ οἴδατε δοκιμάζειν, τὸν καιρὸν δὲ τοῦτον πῶς οὐκ οἴδατε δοκιμάζειν; ※ Nestle (1904) は、最後の語を δοκιμάζετε と現在命令法能動態二人称複数にしている。

(1954年口語訳) 偽善者よ、あなたがたは天地の模様を見分けることを知りながら、どうして今の時代を見分けることができないのか。

(1987年新共同訳) 偽善者よ、〔略〕を見分けることを知らないのか。

※ Bauer (1988, SS406-7) prüfen (調査する)、㉓⑭⑮⑯⑰⑱㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘と同じ用例。

③ルカ14章19節 (㉘動詞アオリスト不定詞能動態)

καὶ ἕτερος εἶπεν Ζεύγη βοῶν ἠγόρασα πέντε, καὶ πορεύομαι δοκιμάσαι αὐτά· ἐρωτῶ σε, ἔχε με παρητημένον.

(1954年訳) ほかの人は、『わたしは五対の牛を買いましたので、それをしらべに行くところです。どうぞ、おゆるしてください』、

(1987年訳) ほかの人は、『牛を二頭ずつ五組買ったので、それを調べに行くところです。どうか、失礼させてください』と言った。※ Bauer (1988, SS406-7) Ochsen auf Ihre Tauglichkeit untersuchen 「牛が役に立つか調べる」。

④ローマ1章28節 (㉘動詞アオリスト直説法能動態三人称複数と㉙形容詞対格男性単数)

Καὶ καθὼς οὐκ ἐδοκίμασαν τὸν Θεὸν ἔχειν ἐν ἐπιγνώσει, παρέδωκεν αὐτοὺς ὁ Θεὸς εἰς ἀδόκιμον νοῦν, ποιεῖν τὰ μὴ καθήκοντα,

(1954年訳) そして、彼らは神を認めることを正しいとしなかつたので、神は彼らを正しからぬ思いにわたし、なすべからざる事をなすに任せられた。

(1987年訳) 彼らは神を認めようとしなかつたので、神は彼らを無価値な思いに渡され、そ

のため、彼らはしてはならないことをするようになりました。※1987年訳は、㊦動詞の訳を文脈に埋没させたが、Bauer (1988, SS406-7) は、試験結果に留意した決定の意味で、sie befanden es nicht für gut, Gott zu erkennen「彼らは神を認めることを良いとは思わなかった」と訳す。同じ用例は、⑮⑲⑱⑩⑧⑳。

⑤ローマ2章18節 (㊦動詞現在直説法能動態二人称単数)

καὶ γινώσκεις τὸ θέλημα καὶ δοκιμάζεις τὰ διαφέροντα κατηχούμενος ἐκ τοῦ νόμου,
(1954年訳)「もしあなたが」御旨を知り、律法に教えられて、なすべきことをわきまえており、

(1987年訳) その御心を知り、律法によって教えられて何をなすべきかをわきまえています。※㉗フィリピ1章10節と同じで was, worauf es ankommt (Bauer, 1988, S407, S382)。

⑥⑦ローマ5章3-4節 (㊦名詞対格女性単数と㊦名詞主格)

οὐ μόνον δέ, ἀλλὰ καὶ καυχόμεθα ἐν ταῖς θλίψεσιν, εἰδότες ὅτι ἡ θλίψις ὑπομονὴν κατεργάζεται, ἡ δὲ ὑπομονὴ δοκιμὴν, ἡ δὲ δοκιμὴ ἐλπίδα.

(1954年訳) それだけでなく、患難をも喜んでいる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである。

(1987年訳) そればかりでなく、苦難をも誇りとします。私たちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。※Bauer (1988, S407) は⑮⑱⑩を同じ意味に挙げる。1987年訳の「～を誇りとする」は καυχόμεθα ἐν τινι、Bauer (1988, SS865-6) の sich rühmen, prahlen mit etwas に当たる。Liddell & Scott (1940, p. 932) は第1義に speak loud を掲げているので、～の中でも胸をはって堂々と話す、と訳せる。これは Bauer (1988, SS865-6) の第2義 um sich damit zu brüsten, soltz sein auf に近い。

⑧ローマ12章2節 (㊦動詞現在不定詞能動態)

καὶ μὴ συνηματιζέσθε τῷ αἰῶνι τούτῳ, ἀλλὰ μεταμορφοῦσθε τῇ ἀνακαινώσει τοῦ νοός, εἰς τὸ δοκιμάζειν ὑμᾶς τί τὸ θέλημα τοῦ Θεοῦ, τὸ ἀγαθὸν καὶ εὐάρεστον καὶ τέλειον.

(1954年訳) あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである。

(1987年訳) あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。

※Bauer (1988, SS406-7) では⑮⑲⑱⑩④㉑と同じ意味。

⑨ローマ14章18節 (㊦形容詞主格男性単数)

ὁ γὰρ ἐν τούτῳ δουλεύων τῷ Χριστῷ εὐάρεστος τῷ Θεῷ καὶ δόκιμος τοῖς ἀνθρώποις.

(1954年訳) こうしてキリストに仕える者は、神に喜ばれ、かつ、人にも受け入れられるのである。

(1987年訳) このようにしてキリストに仕える人は、神に喜ばれ、人々に信頼されます。

※Bauer (1988, S408) は第2義 anerkannt の例とみなしており1954年訳を支持するが、

1987年訳は同第1義の erprobt, bewährt を採用したと解釈できる。

⑩ローマ 14 章 22 節 (㊦動詞現在直説法能動態三人称単数)

σὺ πίστιν ἣν ἔχεις κατὰ σεαυτὸν ἔχε ἐνώπιον τοῦ Θεοῦ. μακάριος ὁ μὴ κρίνων ἑαυτὸν ἐν ᾧ δοκιμάζει.

(1954年訳) あなたの持っている信仰を、神のみまえに、自分自身に持っていないさい。自ら良いと定めたことについて、やましいと思わない人は、さいわいである。

(1987年訳) あなたは自分が抱えている確信を、神の御前で心の内に持っていないさい。自分の決心にやましさを感ぜない人は幸いです。

※ 1987年訳後段は selig, wer sich selbst nicht zu verdammen braucht bei seiner Entscheidung (Bauer 1988, κρίνω, S918; S407) の和訳。δοκιμάζω の原義には 1954年訳の方が近い。

⑪ローマ 16 章 10 節 (㊦形容詞対格男性単数)

ἀπάσασθε Ἀπελλῆν τὸν δόκιμον ἐν Χριστῷ. (略)

(1954年訳) キリストにあつて鍊達なアペレに、よろしく。(略)

(1987年訳) 真のキリスト信者アペレによろしく。(略)

※ Bauer (1988, S408) は⑬第一コリント 11 章 19 節と同じく erprobt「確かな」の例とみる。

⑫第一コリント 3 章 13 節 (㊦動詞未来直説法能動態三人称単数)

ἐκάστου τὸ ἔργον φανερόν γενήσεται· ἡ γὰρ ἡμέρα δηλώσει, ὅτι ἐν πυρὶ ἀποκαλύπτεται, καὶ ἐκάστου τὸ ἔργον ὅποιον ἐστὶν τὸ πῦρ αὐτὸ δοκιμάσει.

(1954年訳) それぞれの仕事は、はっきりとわかってくる。すなわち、かの日は火の中に現れて、それを明らかにし、またその火は、それぞれの仕事がどんなものであるかを、ためすであろう。

(1987年訳) おのおのの仕事は明るみに出されます。かの日にそれは明らかにされるのです。なぜなら、かの日が火と共に現れ、その火はおのおのの仕事がどんなものであるかを吟味するからです。

※ Bauer (1988, SS406-7) は⑳第一ペテロ 1 章 7 節と同じく試験結果に鑑みて証明する意。

⑬第一コリント 11 章 19 節 (㊦形容詞主格男性複数)

δεῖ γὰρ καὶ αἰρέσεις ἐν ὑμῖν εἶναι, ἵνα καὶ οἱ δόκιμοι φανεροὶ γένωνται ἐν ὑμῖν.

(1954年訳) たしかに、あなたがたの中でほんとうの者が明らかにされるためには、分派もなければなるまい。

(1987年訳) あなたがたの間で、誰が適格者かはっきりするためには、仲間争いも避けられないかもしれません。※ Bauer (1988, S408) は⑩ローマ 16 章 10 節の用例と同じ扱い。

⑭第一コリント 11 章 28 節 (㊦動詞現在命令法能動態三人称単数)

δοκιμάζετω δὲ ἄνθρωπος ἑαυτὸν, καὶ οὕτως ἐκ τοῦ ἄρτου ἐσθιέτω καὶ ἐκ τοῦ ποτηρίου πίνετω.

(1954年訳) だれでもまず自分を吟味し、それからパンを食べ盃を飲むべきである。

(1987年訳) だれでも、自分をよく確かめたうえで、そのパンを食べ、その盃から飲むべきです。※ Bauer (1988, SS406-7) ③②③⑤⑤②⑦③③⑨①②②⑥③②③⑩と同じ用例 (prüfen)。

(本稿訳) 何人も、まず己を吟味し、そのうえで、そのパンから〔一切れ摘まんで〕食べ、

その盃から〔一口〕飲むようにしなさい。※ギリシャ語前置詞 ἐκ の意味を表出。

⑮第一コリント 16 章 3 節 (㊤動詞アオリスト接続法能動態二人称複数)

ὅταν δὲ παραγένωμαι, οὗς ἐὰν δοκιμάσητε, δι' ἐπιστολῶν τούτους πέμψω ἀπενεγκεῖν τὴν χάριν ὑμῶν εἰς Ἱερουσαλήμ· ※ Bauer (1988, SS406-7) 第 2 義 b の他の用例⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲。

(1954 年訳) わたしが到着したら、あなたがたが選んだ人々に手紙をつけ、あなたがたの贈り物を持たせて、エルサレムに送り出すことにしよう。

(1987 年訳) そちらに着いたら、あなたがたから承認された人たちに手紙を持たせて、その贈り物を届けにエルサレムに行かせましょう。

(本稿訳) 私が到着したら、あなた方の贈り物を届けるために、あなたがたが信頼できると思う人たちを、手紙を使って〔つまり、そう書いた手紙を持たせて〕エルサレムに送ろう。

※ Bauer (1988, S407) die ihr für geeignet haltet 「あなたがたが適切だと思う人たち」。

⑯第二コリント 2 章 9 節 (㊦名詞対格女性単数)

εἰς τοῦτο γὰρ καὶ ἔγραψα, ἵνα γνῶ τὴν δοκιμὴν ὑμῶν, εἰ εἰς πάντα ὑπήκοοί ἐστε.

(1954 年訳) わたしが書きおくれたのも、あなたがたがすべての事について従順であるかどうかを、ためすためにほかならなかった。

(1987 年訳) わたしが前に手紙を書いたのも、あなたがたが万事について従順であるかどうかを試すためでした。※ Bauer (1988, S407) jedermann als erprobt kennen 「誰かが確かさ〔実証済み〕だと知る」。同じ第 1 義 Erprobtheit の用例は⑥⑦ローマ 5 章 4 節、⑳第二コリント 9 章 13 節、㉑フィリピ 2 章 22 節。

⑰第二コリント 8 章 2 節 (㊦名詞与格女性単数)

ὅτι ἐν πολλῇ δοκιμῇ θλίψεως ἢ περισσεῖα τῆς χαρᾶς αὐτῶν καὶ ἡ κατὰ βάθους πτωχεῖα αὐτῶν ἐπερίσσευσεν εἰς τὸ πλοῦτος τῆς ἀπλότητος αὐτῶν·

(1954 年訳) すなわち、彼は、患難のために激しい試練を受けたが、その満ちあふれる喜びは、極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て惜しみなく施す富となったのである。

(1987 年訳) 彼らは苦しみによる激しい試練を受けていたのに、その満ち満ちた喜びと極度の貧しさがあふれ出て、人に惜しまず施す豊かさとなったということです。

※ Bauer (1988, S407) は㉒とともに第 2 義 Bewährung (検証、試験) と解釈。後に詳述。

⑱第二コリント 8 章 8 節 (㊤動詞現在分詞能動態主格男性単数)

Οὐ κατ' ἐπιταγὴν λέγω ἀλλὰ διὰ τῆς ἐτέρων σπουδῆς καὶ τὸ τῆς ὑμετέρας ἀγάπης γνήσιον δοκιμάζων· ※ Bauer (1988, SS496-7) では第 2 義 b の⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲と同じ用例。

(1954 年訳) こう言っても、わたしは命令するのではない。ただ、他の人たちの熱情によって、あなたがたの愛の純真さをためそうとするのである。

(1987 年訳) わたしは命令としてこう言っているではありません。他の人々の熱心に照らしてあなたがたの愛の純粋さを確かめようとして言うのです。

㉒第二コリント 8 章 22 節 (㊤動詞アオリスト直説法能動態一人称複数)

συνεπέμψαμεν δὲ αὐτοῖς τὸν ἀδελφὸν ἡμῶν, ὃν ἐδοκιμάσαμεν ἐν πολλοῖς πολλαῖς σπουδαῖον ὄντα, νυνὶ δὲ πολὺ σπουδαιότερον πεποιθήσει πολλῇ τῇ εἰς ὑμᾶς. ※ Bauer (1988, SS406-7) 同上。

(1954年訳) また、もうひとりの兄弟を彼らと一緒に送る。わたしたちは、多くの事について彼が熱心であったことを、たびたび認めた。彼は今、あなたがたを非常に信頼して、ますます熱心になっている。

(1987年訳) 彼らにもう一人わたしたちの兄弟を同伴させます。この人が熱心であることは、わたしたちがいろいろな機会にしばしば実際に認めたところです。今、彼はあなたがたに厚い信頼を寄せ、ますます熱心になっています。

㊸第二コリント 9章 13節 (㊸名詞属格女性単数)

διὰ τῆς δοκιμῆς τῆς διακονίας ταύτης δοξάζοντες τὸν Θεὸν ἐπὶ τῇ ὑποταγῇ τῆς ὁμολογίας ὑμῶν εἰς τὸ εὐαγγέλιον τοῦ Χριστοῦ καὶ ἀπλότητι τῆς κοινωνίας εἰς αὐτοὺς καὶ εἰς πάντας,

(1889年文語訳) 即ち彼らは此の務を証拠として、汝らがキリストの福音に対する言明に順ふことと、彼らにも、凡ての人にも吝みなく施すこととに就きて、神に栄光を帰し、(1987年訳) この奉仕の業が実際に行われた結果として、彼らは、あなたがたがキリストの福音を従順に公言していること、また、自分たちや他のすべての人々に惜しまず施しを分けてくれることで、神をほめたたえます。

※ Bauer (1988, S407) は⑥⑦⑩⑫と同じ用例としていて、1987年訳と矛盾する。前後の節を併せたギリシャ語構文の中で捉えてはじめて行為主体が明確化するので後述する。

㊸第二コリント 10章 18節 (㊸形容詞主格男性単数)

οὐ γὰρ ὁ ἑαυτὸν συνιστάνων, ἐκεῖνός ἐστιν δόκιμος, ἀλλὰ ὃν ὁ Κύριος συνίστησιν.

(1954年訳) 自分で自分を推薦する人ではなく、主に推薦される人こそ、確かな人なのである。※ Bauer (1988, S407) は erprobt 「証明済の、確かな」、⑩⑫⑬⑭⑮と同じ用例。

(1987年訳) 自己推薦する者ではなく、主から推薦される人こそ、適格者として受け入れられるのです。

㊸第二コリント 13章 3節 (㊸名詞対格女性単数)

ἐπεὶ δοκιμῆν ζητεῖτε τοῦ ἐν ἐμοὶ λαλοῦντος Χριστοῦ, ὃς εἰς ὑμᾶς οὐκ ἀσθενεῖ ἀλλὰ δυνατεῖ ἐν ὑμῖν.

(1954年訳) なぜなら、あなたがたが、キリストのわたしにあって語っておられるという証拠をもとめているからである。キリストは、あなたがたに対して弱くはなく、あなたがたのうちにあって強い。

(1987年訳) なぜなら、あなたがたは、キリストがわたしによって語っておられる証拠を求めているからです。キリストはあなたがたに対しては弱い方ではなく、あなたがたの間で強い方です。※ Bauer (1988, S407) は⑯と同じ第2義として verlangen, daß es sich bewähre 「それ自体の証明を要求する」。

㊸第二コリント 13章 5節 (㊸動詞現在命令法能動態二人称複数と㊸形容詞主格男性複数)

Ἐαυτοὺς πειράζετε εἰ ἐστέ ἐν τῇ πίστει, ἑαυτοὺς δοκιμάζετε· ἢ οὐκ ἐπιγινώσχετε ἑαυτοὺς ὅτι Ἰησοῦς Χριστὸς ἐν ὑμῖν; εἰ μὴτι ἀδόκιμοί ἐστε.

(1954年訳) あなたがたは、はたして信仰があるかどうか、自分を反省し、自分を吟味するがよい。それとも、イエス・キリストがあなたがたのうちにおられることを、悟らないのか。もし悟らなければ、あなたがたは、にせものとして見捨てられる。

(1954年訳) しかし、テモテの鍊達ぶりは、あなたがたの知っているとおりでである。すなわち、子が父に対するようにして、わたしと一緒に福音に仕えてきたのである。

(1987年訳) テモテが確かな人物であることはあなたがたが認めるところであり、息子が父に仕えるように、彼はわたしと共に福音に仕えました。

※ Bauer (1988, S407) は⑥⑦ローマ5章4節、⑩第二コリント2章9節、⑫同9章13節と同じ Erprobtheit (確かなこと) に分類。

⑳㉑第一テサロニケ2章4節

(㉑動詞完了直説法受動態一人称複数と㉒動詞現在分詞能動態与格男性単数)

ἀλλὰ καθὼς δεδοκιμάσαμεθα ὑπὸ τοῦ Θεοῦ πιστευθῆναι τὸ εὐαγγέλιον οὕτως λαλοῦμεν, οὐχ ὡς ἄνθρωποις ἀρέσκοντες, ἀλλὰ Θεῷ τῷ δοκιμάζοντι τὰς καρδίας ἡμῶν.

(1954年訳) かえって、わたしたちは神の信任を受けて福音を託されたので、人間に喜ばれるためではなく、わたしたちの心を見分ける神に喜ばれるように、福音を語るのである。

(1987年訳) わたしたちは神に認められ、福音をゆだねられているからこそ、このように語っています。人に喜ばれるためではなく、わたしたちの心を吟味される神に喜んでいただくためです。

※㉑は Bauer (1988, S407) wir sind für tauglich befunden worden 「私たちはふさわしいと判定され」。㉒は③④⑫⑮⑯⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺と同じく prüfen。

㉓第一テサロニケ5章21節 (㉓動詞現在命令法能動態二人称複数)

πάντα δὲ δοκιμάζετε, τὸ καλὸν κατέχετε. ※ Bauer (1988, SS406-7) は㉓と同じ用例とみる。

(1954年訳) すべてのものを識別して、良いものを守り、

(1987年訳) すべてのを吟味して、良いものを大事に下さい。

㉔第一テモテ3章10節 (㉔動詞現在命令法受動態三人称複数)

καὶ οὗτοι δὲ δοκιμαζέσθωσαν πρῶτον, εἴτα διακονείτωσαν ἀνεγκλήτοι ὄντες.

(1954年訳) かれらはまず調べられて、不都合なことがなかったなら、それから執事の職につかすべきである。

(1987年訳) この人々もまず審査を受けるべきである。その上で、非難される点がなければ、奉仕者の務めに就かせなさい。※ Bauer (1988, SS406-7) は㉓と同じ用例とみる。

㉕第二テモテ2章15節 (㉕形容詞対格男性単数)

σπούδασον σεαυτὸν δόκιμον παραστήσαι τῷ Θεῷ, ἐργάτην ἀνεπαίσχυντον, ὀρθοτομοῦντα τὸν λόγον τῆς ἀληθείας.

(1954年訳) あなたは真理の言葉を正しく教え、恥じるところのない鍊達した働き人となって、神に自分をささげるように努めなさい。

(1987年訳) あなたは、適格者と認められて神の前に立つ者、恥じるところのない働き手、真理の言葉を正しく伝える者となるように努めなさい。

※ Bauer (1988, S407) は erprobt, bewährt、㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲と同じ用例とみる。

㉖ヘブライ3章9節 (㉖名詞与格女性単数)

οὐ ἐπείρασαν οἱ πατέρες ὑμῶν ἐν δοκιμασίᾳ καὶ εἶδον τὰ ἔργα μου

(1954年訳) あなたがたの先祖たちは、そこでわたしを試みためし…わたしのわざを見たのである。

(1987年訳) あなたがたの先祖は私を試み、験し、…わたしの業を見た。

※ Bauer (1988, S407) *πειράζειν ἐν δοκιμασία* 全体で auf die Probe stellen 「試験過程に載せる」 くらいの意味なので、「試みためす」などと二重に訳す必要はない。

㊥ヤコブ 1 章 2-3 節 (㊥名詞主格中性単数)

Πᾶσαν χαρὰν ἡγήσασθε, ἀδελφοί μου, ὅταν πειρασμοῖς περιπέσητε ποικίλοις, γινώσκοντες ὅτι τὸ δοκίμιον ὑμῶν τῆς πίστεως καταργάζεται ὑπομονήν.

(1954年訳) わたしの兄弟たちよ。あなたがたがいろいろな試練 (πειρασμοῖς) に会った場合、それをむしろ非常に喜ばしいことと思いなさい。あなたがたの知っているとおり、信仰がためされることによって、忍耐が生み出されるからである。

(1987年訳) わたしの兄弟たち、いろいろな試練に出会うときは、この上ない喜びと思いなさい。信仰が試されることで忍耐が生まれるとあなたがたは知っています。

※ Bauer (1988, S407) ㊥箴言 27 章 17 節七十人訳と同じ用例で、das Prüfungsmittel eueres Glaubens wirkt Geduld 「あなたの信仰の試験手段が忍耐を生じさせる」と知りなさい。

㊦ヤコブ 1 章 12 節 (㊦形容詞主格男性単数)

Μακάριος ἀνὴρ ὃς ὑπομένει πειρασμόν, ὅτι δοκιμῶς γενόμενος λήμψεται τὸν στέφανον τῆς ζωῆς, ὃν ἐπηγγέιλαι τοῖς ἀγαπῶσιν αὐτόν.

(1954年訳) 試練を耐え忍ぶ人はさいわいである。それを忍びとおしたなら、神を愛する者たちに約束されたいのちの冠を受けるであろう。

(1987年訳) 試練を耐え忍ぶ人は幸いです。その人は適格者と認められ、神を愛する人々に約束された命の冠をいただくからです。

※ Bauer (1988, S408) は第 1 義 erprobt で㊥㊦㊧㊨㊩と同じ用例とみる。

㊧㊨第一ペテロ 1 章 7 節 (㊧名詞主格中性単数と㊨動詞現在分詞受動態属格中性単数)

ἵνα τὸ δοκίμιον ὑμῶν τῆς πίστεως πολυτιμότερον χρυσοῦ τοῦ ἀπολλυμένου, διὰ πυρὸς δὲ δοκιμαζομένου, εὐρεθῆ εἰς ἔπαινον καὶ δόξαν καὶ τιμὴν ἐν ἀποκαλύψει Ἰησοῦ Χριστοῦ.

(1954年訳) こうして、あなたがたの信仰はためされて、火で精錬されても朽ちる外はない金よりもはるかに尊いことが明らかにされ、イエス・キリストの現れるとき、さんびと栄光とほまれとに変わるであろう。

(1987年訳) あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりもはるかに尊くて、イエス・キリストが現れるときには、賞賛と栄光と誉れとをもたらすのです。

※ Bauer (1988, S407) ㊧は die Echtheit eueres Glaubens 「信仰の真正さ」、㊨は試験結果に基づく期待をもって証明する意味で、㊥第一コリント 3 章 13 節と同じ類型に分類。

㊩第一ヨハネ 4 章 1 節 (㊩動詞現在命令法能動態二人称複数)

Ἀγαπητοί, μὴ παντὶ πνεύματι πιστεύετε, ἀλλὰ δοκιμάζετε τὰ πνεύματα εἰ ἐκ τοῦ Θεοῦ ἐστίν, ὅτι πολλοὶ ψευδοπροφήται ἐξεληλύθασιν εἰς τὸν κόσμον.

(1954年訳) 愛する者たちよ。すべての霊を信じることはしないで、それらの霊が神から出たものであるかどうか、試しなさい。多くのにせ預言者が世に出てきているからである。

※ Bauer (1988, SS406-7) ③⑭⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲と同一用例とみる。

(1987年訳) 愛する者たち、どの霊も信じるのではなく、神から出た霊かどうかを確かめなさい。偽預言者が大勢世に出て来ているからです。

最後に、上記の新約聖書のドキメー語幹共有語の分析の一助に、ここでパウロ書簡以前の名詞ドキメー δοκιμή の用例を見てみたい。中野 (2021年73頁) はそういう用例に否定的で、たしかに紀元前6世紀の『イソップ物語』第274別話 (274aliter) 第17行 (TLG) や紀元1世紀のディオスコリデス『薬物誌』4章184節 (Liddell & Scott, 1940, p. 442) の用例は後世の挿入とされる。しかし、ギリシャ語文献辞典 TLG は、紀元前2世紀は下らない次の旧約聖書偽典の用例を掲げる。

④ 『ヨベル書』ギリシャ語訳断片集、断片 w 第19行 (㊸名詞対格女性単数)

καὶ εὐζαμένου τοῦ Νῶε ἵνα ἀποσταῶσιν ἀπ' αὐτῶν, ὁ κύριος ἐκέλευσε τῷ ἀρχαγγέλῳ Μιχαὴλ βαλεῖν αὐτοὺς εἰς τὴν ἄβυσσον ἄχρι ἡμέρας τῆς κρίσεως·

ὁ δὲ διάβολος ἠτήσατο λαβεῖν μοῖραν ἀπ' αὐτῶν πρὸς πειρασμὸν τῶν ἀνθρώπων καὶ ἐδόθη αὐτῷ τὸ δέκατον αὐτῶν κατὰ πρόσταξιν θεῖαν, ὥστε πειράζειν τοὺς ἀνθρώπους πρὸς δοκιμὴν τῆς ἐκάστου πρὸς θεὸν προαιρέσεως, τὰ δὲ λοιπὰ ἐννέα μέρη ἐβλήθη εἰς τὴν ἄβυσσον.

(本稿訳) 「〔悪霊たち〕が〔ノアの子孫たち〕から離れるようにノアが祈ったので、主は、大天使ミカエルに審判の日まで〔悪霊たち〕を奈落到落とすように命じた。すると悪魔が、〔悪霊たち〕の一部を、人間を試すために、悪魔自身で掌握することを願い出て、人間の各々が神の方を選ぶかどうか見極めるために試すことができるように、神の命によって十分の一を与えられた。残りの〔十分の〕九は奈落到投げ込まれた。」

このギリシャ語訳断片は、字数制限のため詳述を避けるが、唯一完成本が伝わるエチオピア語ヨベル書10章2-11節(村岡1975年52-4頁)の要旨とそれに対する注釈から成る。とはいえ、クムラン文書のようなヘブライ語原典からギリシャ語訳ができたのはヘレニズム期のことで、エチオピア語訳はそのギリシャ語訳に基づくというのが定説なので、この用例はパウロより古い可能性がある。そして、ヨベル書の文脈には㊸動詞 δοκιμάζω ドキマズドーの第1義 prüfen (調べる) という意味が最も妥当すると思われる (Bauer, 1988, SS406-7)。㊸ヘブライ3章9節もこれにならい、「見極めるために試した」と訳す方が自然かも知れない。これに対し、パウロ書簡の名詞用例⑥⑦⑬⑭⑰⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲は㉓形容詞の第1義 erprobt (試して証明された) の意味に近い (Bauer, 1988, S408)。ただし、⑬第二コリント2章9節の1954年と1987年の和訳は、㊸動詞の意味に近い。

3. 検討

まず、⑥⑦ローマ5章4節のドキメーを文脈の中で捉えたい。EKK (Wolter, 2019) によれば、ローマ5章3節の苦難は、キリスト者がキリスト者であるが故に経験する試練であり、ローマ5章2節のいうキリスト者の実存の印となる希望は (S322)、この苦難の経験から自他を区別する経験としての特性を奪い、むしろキリスト者とは何者であるのかについて

での自覚を促すものだと説いている (S323)。それだけでなく、ローマ 5 章 3-4 節が、㉔ヤコブ 1 章 2-4 節 (試練を喜べ、信仰が試されると忍耐が生まれ、忍耐すれば全き人になる) や㉗㉘第一ペテロ 1 章 6-7 節 (信仰の確かさは火で試されると朽ちる金より尊い) と似ているのは、次の七十人訳聖書外典などのユダヤ教の信仰のあり方の伝統が、新約書簡の著者たちに受け継がれて三者三様に表現されたのだという (SS325-6)。

④①『知恵の書』3章4-6節 (㊟動詞アオリスト直説法能動態三人称単数)

3.4. καὶ γὰρ ἐν ὄψει ἀνθρώπων ἐὰν κολασθῶσιν, ἢ ἐλπίς αὐτῶν ἀθανασίας πλήρης· 3.5. καὶ ὀλίγα παιδευθέντες μεγάλα εὐεργετηθήσονται, ὅτι ὁ θεὸς ἐπείρασεν αὐτοὺς καὶ εἶδεν αὐτοὺς ἀξίους ἑαυτοῦ· 3.6. ὡς χρυσὸν ἐν χωνευτηρίῳ ἐδοκίμασεν αὐτοὺς καὶ ὡς ὀλοκάρπωμα θυσίας προσεδέξατο αὐτοῦς. (出典 TLG, Septuaginta, *Sapientia Salomonis*)

(本稿訳)「3.4 なぜなら、たとえ人の目には懲罰に見えても、彼らは不死の希望で満ちあふれているからである。3.5 彼らは、少しの懲らしめを受けて、大きな恩恵を授かるだろう。なぜなら、神が彼らを試した結果、神自身にふさわしい者たちであることが判明したからである。3.6 神は、彼らをまるで炉の中の金のように試し、焼き尽くすいけにえとして受け入れた。」

なお、ここの「炉の中の金」という表現は、エゼキエル 22 章 20 節「銀、銅、鉄、鉛、錫が炉 (כּוּר; κάμνος) の中に集められ、火を吹きつけて溶かされる (לְהַחֲרֹתָוּ אֶשׁ לְהַחֲרִיךְ; τοῦ ἐκφουσησαι εἰς αὐτὸ πῦρ τοῦ χωνευθῆναι) ように、私は怒りと憤りをもって、あなたがたを集め、投げ入れて、溶かす」と共通する。後者は、骨を焼いて砕いた灰の上に銀鉱石を鉛と一緒にに入れて火を吹きつけて溶かし、不純物が鉛と一緒に灰の中に浸み込んで純度の高い銀が灰の上に残る灰吹法を描写していると思われる。「焼き尽くすいけにえ」というのは例えばレビ 16 章 24 節の 2018 年訳の表現であるが、この灰吹法で真っ赤に焼けたまま灰の中に浸み込まず灰の上に残る金にもよく当てはまる。次の箴言 17 章 3 節や 27 章 21 節にもみられるように、灰吹法は金の製錬にも用いられる。

④②箴言 17 章 3 節七十人訳 (㊟動詞現在直説法受動態三人称単数)

ὡςπερ δοκιμάζεται ἐν καμίνῳ ἄργυρος καὶ χρυσός, οὕτως ἐκλεκταὶ καρδία παρὰ Κυρίου·

(本稿訳)「金や銀が炉の中で見分けられるように、心は主によって選別される。」

これも灰吹法で火を吹きつけて金銀と不純物とを分ける様を、主によって人の心が選別されることの比喩に用いたと捉えられる。

④③④箴言 27 章 21 節七十人訳

(㊟名詞中性主格単数) (㊟動詞現在直説法受動態三人称単数)

δοκίμιον ἄργύρῳ καὶ χρυσῷ πύρωσις, ἀνὴρ δὲ δοκιμάζεται διὰ στόματος ἐγκωμιαζόντων αὐτόν.

מַצְרֵי כֶסֶף וְזָהָב בְּאֵשׁ מִלִּפְּיָם:

(本稿訳)「見分ける方法は、銀や金には火炎、人は彼を誉める口によって見分けられる。」

この訳は、ヘブライ語が「銀には^{るつぼ}坩堝 (מַצְרֵי) そして金には炉 (כּוּר)、人は褒め言葉によって」という片言の格言であることを踏まえ、ギリシャ語訳は坩堝と炉を火で統一し、ドキメー語幹共有語 (④③⊕ Bauer, 1988, S407, Prüfungsmittel (Spr 27,21) と④④⊕) を補足して

言外の意味を説明したと解釈した。

ともかく、④知恵の書3章6節がユダヤ教の信仰の伝統を表し、⑥⑦ローマ書5章4節や⑤ヤコブ1章3節や③⑧第一ペテロ1章7節において三者三様に受け継がれているのであれば、日本語もその三者で大きく訳が異なるべきではないだろう。確かに金の製錬のたとえで純度が上がれば品位も上がるが、それは人の「品格」を現代の日本語文化の中で捉えたときの「気品」(木原2001年11巻634頁③)や「品のよさ」(木原2001年11巻633頁②)という主観的、美学的、感覚的価値とはまったく異質で、客観的である。ちなみに1889年文語訳聖書は、⑥⑦ロマ〔ローマ〕5章4節だけ糸偏の「練達」、⑪ロマ〔ローマ〕16章10節と⑫ピリピ〔フィリピ〕2章22節と⑬後テモテ〔第二テモテ〕2章15節は金偏の「鍊達」と訳しているが、このような区別は、ギリシャ語原典の単語レベルでは存在せず、以上の考察に従えば、すべて金偏の方が比喻として適切であろう。

次に、上記新約39例の中で、ドキメー語幹共有語が「奉仕」と訳せるギリシャ語と合わせて出てくるのは、⑨ローマ14章18節(①形容詞)、⑫第二コリント9章13節(⑦名詞)、⑫フィリピ2章22節(⑦名詞)、⑬第一テモテ3章10節(④動詞)の4つである。うち、奉仕に当たるギリシャ語はマルコ10章43節と同じ *διακονέω* 系の⑫と⑬およびマルコ10章44節と同じ *δουλεύω* 系の⑨と⑫に分かれる。

1. 奉仕(執事)系 *διακονέω/διακονία* (マルコ10章43節系)

⑫第二コリント9章13節(⑦名詞属格女性単数)

διὰ τῆς δοκιμῆς τῆς διακονίας ταύτης δοξάζοντες τὸν Θεὸν ἐπὶ τῇ ὑποταγῇ τῆς ὁμολογίας ὑμῶν εἰς τὸ εὐαγγέλιον τοῦ Χριστοῦ καὶ ἀπλότητι τῆς κοινωνίας εἰς αὐτοὺς καὶ εἰς πάντας,

(本稿訳) この奉仕の証明によって、つまり、あなた方が従順にキリストの福音を告白(公言)し、素直に〔エルサレムの聖徒たち〕*及びすべての〔聖徒〕たちの仲間になっていることのために、〔聖徒たちは〕神を讃美するようになります。

*「聖徒たち」は、9章1節の *τοὺς ἁγίους* 及び同12節の *τῶν ἁγίων* の訳で、ローマ15章26節に明示されているエルサレムの聖徒たちと思われる (Thrall, 2000, p. 506)。それを現在分詞 *δοξάζοντες* (主格男性複数) の主語に当てるのも ICC (Thrall, 2000, p. 588) と EKK (Schmeller, 2015, S101) の注解に従う。*ἀπλότης* を素直と訳し、*κοινωνία* の対象を資金の共有よりも広く解するのも ICC (Thrall, 2000, pp. 590-591) と EKK (Schmeller, 2015, SS101-2) の注解に従う。ICC と EKK の違いは、前者が *καὶ εἰς πάντας* を根拠にして資金説をむしろ排除するのに対して、後者は、資金の共有を含めたより広いつながりと解釈していて、エルサレムの聖徒たちと全員というときの全員とは、パウロがエルサレムの信徒たちを全キリスト教徒の代表と見なし、エルサレムとのつながりが、全聖徒とのつながりになると考えていたということから説明している。

⑬第一テモテ3章10節(④動詞現在命令法能動態三人称複数)

καὶ οὗτοι δὲ δοκιμαζέσθωσαν πρῶτον, εἴτα διακονείτωσαν ἀνεγκλιτοὶ ὄντες.

(本稿訳) この人たちも、まず審査を受けさせなさい。その上で、非難される点がなければ、奉仕者(執事)の務めに就かせなさい。

Ⅱ. 奴隷（従僕）系 δουλεύω/δούλος（マルコ 10 章 44 節系）

⑨ローマ 14 章 18 節（㊦形容詞主格男性単数）

ὁ γὰρ ἐν τούτῳ δουλεύων τῷ Χριστῷ εὐάρεστος τῷ Θεῷ καὶ δόκιμος τοῖς ἀνθρώποις.

（1987 年訳）このようにしてキリストに仕える人は、神に喜ばれ、人々に信頼されます。

⑩フィリピ 2 章 22 節（㊧名詞対格女性単数）

τὴν δὲ δοκιμὴν αὐτοῦ γινώσκετε, ὅτι ὡς πατρὶ τέκνον σὺν ἐμοὶ ἐδούλευσεν εἰς τὸ εὐαγγέλιον.

（1987 年訳）テモテが確かな人物であることはあなたがたが認めるところであり、息子が父に仕えるように、彼はわたしと共に福音に仕えました。

⑩第二コリント 9 章 13 節における「奉仕」には、以下に詳述するように伝道（福音を告白するという従順さ）と献金（献金を含め共同体の仲間として行動する素直さ）の 2 つの要素があるように思われる。「告白」と訳した ὁμολογία (Bauer, 1988, S1153) には「同じ言葉」「言葉の一致」という文字通りの意味があって、文脈的には同じ信仰の共有ということで、共同体 κοινωμία とつながる。また、⑨ローマ 14 章 18 節も⑩フィリピ 2 章 22 節も⑪第一テモテ 3 章 10 節も献金を含めた信仰共同体の一員としての伝道奉仕を視野に含めて捉えた方が適格であろうと思われる。

実は、第二コリント 9 章 13 節は、ギリシャ語原典では、次のように 9 章 10 節から 14 節まで合わせて 1 文を成す構文の一部なので、全体の訳を提供してみる。

10 Ὅ δὲ ἐπιχορηγῶν σπόρον τῷ σπεύροντι καὶ ἄρτον εἰς βρώσιν χορηγήσει καὶ πληθυνεῖ τὸν σπόρον ὑμῶν καὶ αὐξήσει τὰ γενήματα τῆς δικαιοσύνης ὑμῶν· 11 ἐν παντὶ πλουτιζόμενοι εἰς πᾶσαν ἀπλότητα ἣτις κατεργάζεται δι' ἡμῶν εὐχαριστίαν τῷ Θεῷ, 12 ὅτι ἡ διακονία τῆς λειτουργίας ταύτης οὐ μόνον ἐστὶν προσαναπληροῦσα τὰ ὑστερήματα τῶν ἁγίων ἀλλὰ καὶ περισσεύουσα διὰ πολλῶν εὐχαριστιῶν τῷ Θεῷ, 13 διὰ τῆς δοκιμῆς τῆς διακονίας ταύτης δοξάζοντες τὸν Θεὸν ἐπὶ τῇ ὑποταγῇ τῆς ὁμολογίας ὑμῶν εἰς τὸ εὐαγγέλιον τοῦ Χριστοῦ καὶ ἀπλότητι τῆς κοινωνίας εἰς αὐτοὺς καὶ εἰς πάντας, 14 καὶ αὐτῶν δεήσει ὑπὲρ ὑμῶν ἐπιποθούντων ὑμᾶς διὰ τὴν ὑπερβάλλουσαν χάριν τοῦ Θεοῦ ἐφ' ὑμῖν.

（本稿訳）「10 種をまく人に種を、糧としてパンを、お与えになる方は、あなた方に与える種を増やし、あなた方の正当な実り〔収穫〕を増やし、11 全てにおいてあなた方を富ませてください。そのため、私たちは、まったく下心なく #、神に感謝を捧げるようになります。12 奉仕、つまり、この献金* は、〔エルサレムの〕聖徒たちの欠乏を十分に満たすだけでなく、神に対して豊かな感謝の気持ちをおふれさせるのです。13 この奉仕の証拠によって、つまり、あなた方がキリストの福音を告白する従順さによって、〔エルサレムの聖徒たち〕及びすべての〔聖徒〕たちと共同体を形成する純真さ # によって、14 そして〔エルサレムの聖徒たちが〕、あなた方の上にあふれる神の恩恵の故にあなた方を慕いながら +、あなた方のために捧げる祈りによって、〔全聖徒が〕† 神を讃美するようになります。」

*EKK (Schmeller, 2015, S99) によれば、第 12 節の ἡ διακονία τῆς λειτουργίας ταύτης は、エルサレムの信徒たちのための集金活動を「奉仕」(διακονία) と呼び、それに補足 (epexegetic)

属格(τῆς λειτουργίας ταύτης)が続いて奉仕を補足説明している。この補足説明の λειτουργία について、EKK (Schmeller, 2015, S99) は「1 公衆のための義務的又は自発的奉仕、例えば公共事業のための市民の出費、2 宗教的奉仕(ユダヤ教徒と異教徒の両領域で)、3 一般的に奉仕」の3つの意味を挙げる。しかし、これは、ローマ15章26-27節の「マケドニアとアカイアはエルサレムの聖徒たちの間の貧窮者たちのために喜んで献金したが、異邦人たちが喜ぶのは、彼らも負債を負っているからであり、彼らは、もしエルサレムの聖徒たちの霊的なものを共有しているのなら、その肉体的なものについても仕えるように負債を負っているからである」の「仕える」に当たる λειτουργῆσαι(動詞アオリスト不定詞能動態)と同じ語幹の名詞である。従って διακονία(奉仕)との重複を避けるために λειτουργία を「献金」と訳してもよいだろう。

#「下心なく」と「純真さ」は、同じギリシャ語(ἀπλότης)である。Bauer(1988, S171)は、ローマ12章8節、第二コリント8章2節、同9章11、13節の用例として Die schlichte Güte, die sein ohne Hintergedanken entäußert「下心なく自分のものを手放す純朴な善良さ」を掲げて、「素直さ」から「惜しみのなさ」までの幅を上手に説明している。一律に「惜しみない」という訳語に統一すべき理由はないと思われる。

+絶対属格 αὐτῶν [...] ἐπιποθούντων は、「彼ら[エルサレムの聖徒たち]が慕うので」、「慕うとき」などの事実上の従属節を形成する。

†9章13節の現在分詞 δοξάζοντες(主格男性複数)は定動詞(verbum finitum)との組み合わせ(Blass, Debrunner, Rehkopf, 2001, S397)であるが、この動詞の主体を先に ICC(Thrall, 2000, p. 588)と EKK(Schmeller, 2015, S101)の注解に従い、「エルサレムの聖徒たち」に限定して訳した。しかし、定動詞と組む分詞は第13節にしか出現せず、第14節の ἐπιποθούντων は αὐτῶν とともに絶対属格を形成している。ICC(Thrall, 2000, p. 592)は、これを絶対属格で同時に定動詞[との組み合わせ]だと言うが、絶対属格は従属節の役割を果たすので、この説は採用し難い。何より、第13節の ἐπι に続く与格名詞は同節の ὑποταγῆ(従順さ)と ἀπλότητι(純真さ)だけでなく、続く第14節の δεήσει(祈り)もあるので、前者2つがコリント教会員のもの、後者がエルサレム教会員のもので、互いの態度が互いに与える効果を第13節の現在分詞が受けていることと、EKK(Schmeller, 2015, SS101-2)の説くエルサレム教会の代表的地位を踏まえると、「全聖徒たちが神を讃美する」と訳するのが適切ではないかと思われる。

さて、数節にまたがるギリシャ語の長大な構文を考えると、⑰第二コリント8章2節のドキメー(練達)の例も、1-7節で1つの構文であり、同4節に奉仕の語が出てくる。また、⑲第二コリント8章22節のドキメーの例は、同24節まで続く構文ではあるが、その前の8章18-21節の構文の中の19節と20節にも奉仕に当たる言葉が出てくる。以下に順に全体を訳出してみる。

⑰第二コリント8章1節から7節

1 Γνωρίζομεν δὲ ὑμῖν ἀδελφοί τὴν χάριν τοῦ Θεοῦ τὴν δεδομένην ἐν ταῖς ἐκκλησίαις τῆς Μακεδονίας
2 ὅτι ἐν πολλῇ δοκιμῇ θλίψεως ἢ περισσεΐα τῆς χαρᾶς αὐτῶν καὶ ἡ κατὰ βάθους πτωχεΐα αὐτῶν

ἐπερίσσευσεν εἰς τὸ πλοῦτος τῆς ἀπλότητος αὐτῶν 3 ὅτι κατὰ δύναμιν, μαρτυρῶ, καὶ παρὰ δύναμιν, αὐθαίρετοι 4 μετὰ πολλῆς παρακλήσεως δεόμενοι ἡμῶν, τὴν χάριν καὶ τὴν κοινωνίαν τῆς διακονίας τῆς εἰς τοὺς ἁγίους, 5 καὶ οὐ καθὼς ἠλπίσαμεν, ἀλλὰ ἑαυτοὺς ἔδωκαν πρῶτον τῷ Κυρίῳ καὶ ἡμῖν διὰ θελήματος Θεοῦ, 6 εἰς τὸ παρακαλέσαι ἡμᾶς Τίτον, ἵνα καθὼς προενηρξάτο οὕτως καὶ ἐπιτελέσει εἰς ὑμᾶς καὶ τὴν χάριν ταύτην. 7 ἀλλ' ὅσπερ ἐν παντὶ περισσεύετε, πίστει καὶ λόγῳ καὶ γνώσει καὶ πάσῃ σπουδῇ καὶ τῇ ἐξ ἡμῶν ἐν ὑμῖν ἀγάπῃ, ἵνα καὶ ἐν ταύτῃ τῇ χάριτι περισσεύητε.

(本稿訳) 「1 兄弟たち、私たちは、マケドニアの諸教会に与えられた神の恩恵についてあなた方〔コリントの信徒たち〕にお知らせします。2〔マケドニアの信徒たち〕は、幾多の苦難の試練の中で*、喜びに満ち溢れながら貧困のどん底に落ちて、素直さという富に溢れるようになりました#。3 私は証言します。〔信徒たちは、その〕能力に従い、能力を超えて、自らの意思で、4 聖徒たちに奉仕するという形での恩恵と共同体への参加+を、私たちにしきりに願いました。5 それも、私たちの望んだようではなく、彼ら自身が神の御旨に従い、まず主に、次に私たちに、献身しました。6 そのため、私たちは、テイトスを、元々あなた方のために自らこの恩恵の業を始めたのだから成し遂げるようにといて励まし、7 他方、あなた方を、すべてに、つまり信仰と言葉と知識とあらゆる勤勉さと私たちからあなた方への愛に、満ち溢れているのだから、この恩恵にも満ち溢れるようにといて〔励ましました〕†。

*2 節「苦しみゆえの激しい試練」の「ゆえ」にあたるギリシャ語の要素は存在しない。

#2 節 マケドニアの信徒たちの喜びが満ち溢れることと、貧困のどん底に落ちることとが一組になって、その2つがあふれて富になるとされているのは、ハプロテースである。2018年訳はこれを「真心」と訳しており「真心という富」（補足説明属格）にあふれるのだから、「～にもかかわらず」という原文にない逆説を挿入する必要はない。

+ 4 節の κοινωνίαν は EKK (Schmeller, 2015, S48) によれば、単に参加という意味での共同体を意味する。続く τῆς διακονίας τῆς εἰς τοὺς ἁγίους は補足説明属格で、この奉仕は EKK (Schmeller, 2015, S48) によれば、公的で制度的な性格をもち、私的なものではない。

†6 節の παρακαλέσαι (アオリスト不定詞) は 6 節と 7 節の 2 つの ἵνα+接続法にかかるので、「励ました」という訳語を 2 回繰り返した。

⑩第二コリント 8 章 18-24 節

18 Συνεπέμψαμεν δὲ μετ' αὐτοῦ τὸν ἀδελφὸν οὗ ὁ ἔπαινος ἐν τῷ εὐαγγελίῳ διὰ πασῶν τῶν ἐκκλησιῶν 19 οὐ μόνον δὲ ἀλλὰ καὶ χειροτονηθεὶς ὑπὸ τῶν ἐκκλησιῶν συνέκδημος ἡμῶν σὺν τῇ χάριτι ταύτῃ τῇ διακονουμένῃ ὑφ' ἡμῶν πρὸς τὴν αὐτοῦ τοῦ Κυρίου δόξαν καὶ προθυμίαν ἡμῶν 20 στελλόμενοι τοῦτο μὴ τις ἡμᾶς μωμήσῃται ἐν τῇ ἀδρότῃ ταύτῃ τῇ διακονουμένῃ ὑφ' ἡμῶν 21 προνοοῦμεν γὰρ καλὰ οὐ μόνον ἐνώπιον Κυρίου ἀλλὰ καὶ ἐνώπιον ἀνθρώπων. 22 Συνεπέμψαμεν δὲ αὐτοῖς τὸν ἀδελφὸν ἡμῶν ὃν ἐδοκιμάσαμεν ἐν πολλοῖς πολλακίς σπουδαίον ὄντα νυνὶ δὲ πολὺ σπουδαιότερον πεποιθήσει πολλῇ τῇ εἰς ὑμᾶς 23 εἴτε ὑπὲρ Τίτου κοινωνὸς ἐμὸς καὶ εἰς ὑμᾶς συνεργός εἴτε ἀδελφοὶ ἡμῶν ἀπόστολοι ἐκκλησιῶν δόξα Χριστοῦ 24 τὴν οὖν ἐνδειξίν τῆς ἀγάπης ὑμῶν καὶ ἡμῶν καυχίσεως ὑπὲρ ὑμῶν εἰς αὐτοὺς ἐνδεικνύμενοι εἰς πρόσωπον τῶν ἐκκλησιῶν.

(本稿訳)「18 私たちは、〔ティトス〕とともに、兄弟を一人一緒に送り出しました。彼は、福音を述べ伝えてすべての教会で賞賛されています。19〔彼は〕それだけでなく、主の栄光と私たちの熱意のために私たちが奉仕している恩恵とともにあるために、私たちの旅の同伴者として諸教会から選ばれました。20 私たちが執事〔奉仕者〕として管理する潤沢な寄付金について誰かが私たちがとがめることのないように、21 私たちは、主の目だけでなく、人々の目においても、公明正大であるようにとても注意しています。22 私たちは、以上の二人に加えて、兄弟をもう一人一緒に送り出しました。私たちは、彼が、多くの事柄においてしばしばやる気があることを確かめました。今、彼は、あなた方を厚く信頼して、ますますやる気になっています。23 私の同伴者であり、あなた方のための協働者であるティトスについてであれ、私たちの兄弟、諸教会の使徒、キリストの栄光である〔二人について〕であれ、24 したがって、あなた方の愛と私たちのあなた方に対する自慢を彼ら〔三人〕に証明することで、諸教会の前で証明してください*。」

(下線部注) 19 節と 20 節にある *διακονία* と語幹を共有する *διακονουμένη* (現在分詞受動態与格女性単数) を (19 節)「恩恵の業に従事する」、(20 節)「寄付金を執事として管理する」と意識したが、これは上述の EKK (Schmeller, 2015, S48) の指摘する奉仕 *διακονία* の公的、制度的性格を反映したものである。Schmeller (2015, S76) は、パウロを献金不正の疑惑から守るためにコリント派遣団が結成されたと 20 節の趣旨を解釈しており、この趣旨は、ティトスの同伴者を諸教会が任命した「手順」という 2018 年の日本語訳 (ただし「手順」に当たるギリシャ語は原文に存在しない) にも表されている。この疑惑は、ICC が指摘するように、第二コリント 12 章 16 節で「私はあなた方に負担をかけなかったのに、私は悪賢くてあなた方から騙し取った [ことになっています]」(*ἐγὼ οὐ κατεβάρησα ὑμᾶς· ἀλλὰ ὑπάρχων πανοῦργος δόλω ὑμᾶς ἔλαβον*) と、パウロの金銭的な清廉潔白さに疑いが掛けられていたこと (Thrall, 2000, p. 516) と無関係ではないだろう。少なくとも EKK は 10-13 章を 8 章と同じ書簡の一部とみて、現に疑惑があったからこそ保護措置を採ったと解釈する (Schmeller, 2015, S76)。さらに EKK によれば、21 節 *προνοοῦμεν γὰρ καλὰ οὐ μόνον ἐνώπιον Κυρίου ἀλλὰ καὶ ἐνώπιον ἀνθρώπων* は、箴言 3 章 4 節の七十人訳 *καὶ προνοοῦ καλὰ ἐνώπιον Κυρίου καὶ ἀνθρώπων* 「主と人々の目において公明正大であるように注意なさい」の引用であるが、「主の目だけでなく人々の目においても、我々は公明正大であるように注意しています」とパウロは人々の目に力点を置いている (Schmeller, 2015, S77)。このように、パウロがコリントの信徒から向けられた疑惑の目に答えようとしている姿が観察できる。公明正大はギリシャ語 *καλὰ* (美しい) の訳であるが、ヘブライ語 *צדק* からの訳であり、どちらも英語では *fair* と訳せる。

(下線部注) 22 節は、19 節で諸教会から選挙された無名の同伴者の他にもう一人無名の同伴者がいるというが、この人については「選挙」*χειροτονέω* という言葉は使われなかったのに、パウロが 23 節ではティトスと同伴者 2 名の計 3 名を「諸教会の使徒」と言及している矛盾を、EKK は指摘している (Schmeller, 2015, S78)。とはいえ、22 節の動詞は一人称複数で「私たちは 3 人目の熱心さを確かめた」という意味なので (Bauer, 1988, S407)、パ

ウロが個人的に確かめたというよりは、諸教会が確かめたと、より客観性を持たせた表現になっているように思われる。

*24 節の ἐνδεικνύμενοι は ἐνδείκνυμι (証明する) の現在分詞中間態主格男性複数で、その 11 語前にある ἐνδειξις と同じ語幹であるが、ICC によれば、この現在分詞は命令の力を持つ奨励 (exhortation) であるというので (Thrall, 2000, p. 555)、そのように訳した。

なお、ICC は第二コリント 8 章が 24 節の奨励をもって終わることにより、ここで書簡が切れるという説に支持を与えている (Thrall, 2000, p. 556)。一方、EKK は、仮に 8 章と 10-13 章が別々の書簡であれば、12 章 16-18 節の疑惑は、コリント派遣団の結成のかなり前かかなり後になるだろうとしているが (Schmeller, 2015, S77)、仮にそうであったとしても、個人とは区別される派遣団 (8 章 20 節) が、諸教会からの多額の献金を預かりつつ伝道奉仕することに必要な公明正大さや信頼性 (ドキメー) という価値の客観的な証明のために必要とされたこと自体を否定できる筋合いのものではないと思われる。

4. 結論

ローマ 5 章 4 節のドキメーは、ユダヤ教の信仰の伝統を受け継ぎ、試練に耐え残る信仰の確かさであって、「人格」というよりはキリスト者としてのアイデンティティであり、「品格」のような美学とは異質であるから、「練達」という古典的な直訳の方が良かろう。第二コリント 8-9 章の文脈から浮かび上がるドキメーは、献金を預かる伝道奉仕者の信頼性を意味し、この意味は、他の文脈にも応用できるだろう。

文献目録

- Bauer, W. (1988) *Griechisch-deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und der frühchristlichen Literatur*, 6 Auflage, Berlin: Walter de Gruyter.
- Blass, F., Debrunner, A., Rehkopf, F. (2001) *Grammatik des neutestamentlichen Griechisch*, 18 Auflage, Göttingen: Vandernhoeck & Ruprecht.
- Collins, J. N. (2014) *Diakonia Studies: Critical Issues in Ministry*, Oxford: Oxford University Press.
- Drosdowski, G., Müller, W., Scholze-Stubenrecht, W., und Wermke, M. Hgg. (1996) *Deutsches Universalwörterbuch*, 3 Auflage, Mannheim: Dudenverlag.
- King James Bible Online, *1611 King James Version*,
 url: https://www.kingjamesbibleonline.org/Romans-Chapter-5_Original-1611-KJV/ <accessed 1 October 2023>
- Gemoll, W. und Vretska, K. (2012) *Griechisch-deutsches Schul- und Handwörterbuch*, München: Oldenbourg.
- Lewis, C. T. (1889) *A Latin Dictionary for Schools*, Oxford: Clarendon Press.
- Liddell, H. G. and Scott, R. (1940) *A Greek-English Lexicon*, Oxford: Clarendon Press.
- Luther, M. (1545) *Luther Bibel 1545* (LUTH1545)
 https://www.biblegateway.com/versions/Luther-Bibel-1545-LUTH1545/#booklist <accessed 1 October 2023>
- Matthew, T. (1537) *1537 Matthew's Bible First Edition*,
 url: <https://bibles-online.net/flippingbook/1537/1022> <accessed 1 October 2023>

- Mayer, E. (2014) *The Culture Map: Breaking Through the Invisible Boundaries of Global Business*, New York: Public Affairs.
- Nestle, E. (1904) *H KAINH Δ IA Θ HKH*, <https://sites.google.com/site/nestle1904/> 〈accessed 1 October 2023〉
- Pantelia, M. (2013) *Thesaurus Linguae Graecae: A Digital Library of Greek Literature* (TLG), Irvine CA: The University of California Irvine.
- Schmeller, T. (2015) *Der zweite Brief an die Korinther*, Evangelisch-Katholischer Kommentar zum Neuen Testament (EKK) Band VIII, Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlagesgesellschaft mbH.
- Stevenson, A. ed. (2007) *New Shorter Oxford English Dictionary on Historical Principles*, Oxford: Oxford University Press.
- Thrall, M. (2000) *A Critical and Exegetical Commentary on the Second Epistle to the Corinthians*, The International Critical Commentary on the Holy Scriptures of the Old and New Testaments (ICC), Edinburgh: T&T Clark.
- Tyndale, W. (1534) *William Tyndale Bible 1534 in Textus Receptus Bibles*,
url: <https://textusreceptusbibles.com/Tyndale/45/5> 〈accessed 1 October 2023〉
- Westcott, B. F. and Hort, F. J. (1881) *Greek New Testament with Morphology*, <https://biblehub.com>
- Wolter, M. (2019) *Der Brief an die Römer*, Evangelisch-Katholischer Kommentar zum Neuen Testament (EKK) Band VIII, Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlagesgesellschaft mbH.
- 池田裕子 (2000 年) 「カナダ訪問記—C. J. ベーツ 第四代院長関係資料調査の旅—」 関西学院史紀要 6 号 154-193 頁
- 木原保雄、久保田淳、谷脇理史、徳川宗賢、林大、前田富禎、松井栄一、渡辺実編 (2001 年) 『日本国語大辞典第二版』 東京、小学館
- 欽定訳 King James Version (1611 年) 〈biblehub.com〉 参照
- 相良守峯 (1963 年) 『木村・相良独和辞典新訂』 東京、博友社
- 辻学 (2002 年) 「『奉仕のための練達』 一校訓の翻訳をめぐる」 商学論究 50 巻 1・2 合併号 701-714 頁
- 辻学 (2006 年) 「校訓 Mastery for Service と『ベーツ文書』」 関西学院史紀要 12 号 7-27 頁注 30
- 村岡崇光 (1975 年) 「ヨベル書」 日本聖書学研究所編 『聖書外典偽典 4 旧約偽典 II』 東京、教文館 13-158 頁
- 中野実 (2021 年) 「⑧練達がなぜ品格に」 浅野淳博、伊東寿泰、須藤伊知郎、辻学、中野実、廣石望 『ここが変わった！ 『聖書協会共同訳』』 東京日本キリスト教団出版局 72-75 頁
- 日本聖書協会 (1954 年) 口語訳新約聖書
- 日本聖書協会 (1987 年) 新共同訳新約聖書
- 日本聖書協会 (2018 年) 聖書協会共同訳